

Vol. 91

CONTENTS

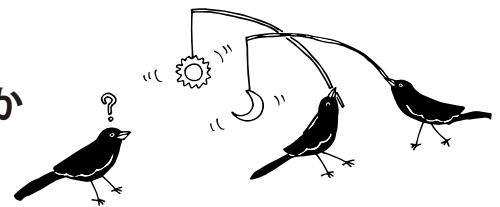
【コラム】物事を疑って見えていますか… 加藤 謙一

【解説】プログラミングセミナー Exciting Coding! junior と今後の展望… 吉田 葵・伊藤 一成

【解説】Scratch 2018 Tokyo 開催報告—プログラミングによる創造的な学びとは—… 宮島 衣瑛・杉浦 学

COLUMN

物事を疑って見えていますか



私自身は企業でSEとして働いていたが、近年は採用担当者となり多くの学生と会っている。就職活動で会う学生の評価で多いのが「真面目で素直」である。どこの企業の採用担当者と話しても同じ答えが多い。これは決して褒め言葉だとは思っていない。言ったことは素直にやってくれる良い学生ではあるが、理解してやっているのか、納得してやっているのかは疑問である。「言われたから」「周りがやっているから」というのが本当のところではないか。周りと違うことをやることを嫌う、人とぶつかることを嫌う、そんな生活を幼少期から送ってきたのではないだろうか。

思い出してほしい。子供のころにどんなことをして遊んだろう。遊ぶものが少なかった時代は工夫して遊んでいた。何かほかのことに使えないか考えていた。ところが今の学生が育っている時代は遊び道具が多く、決まったルールの中で遊んできている。そこでは工夫する必要がないし、ルールは守るものだから周りと同じ行動しかとれない学生が増えてしまった気がしている。

「学び」で考えれば素直に聞いて覚えればよいのかもしれないが「研究」する際は疑う姿勢を見せてほしい。何かを疑わなければ新しい発見はできない。先生が言っているから正しいと信じるのもよいがちょっとでも疑問に思う点を見つければそこは追及してほしい。そこから何か生まれる可能性がある。

実際のシステムで不具合が起きるのはイレギュラーケースのときである。正しいデータが送られてきて動くのは当たり前、イレギュラーの際にシステムダウンさせずにセーフティーに動かす。そのためにはいろいろ疑わないと設計できない。「もしかしたら」というケースを想定して対応しておかなければ24時間365日稼働するシステムはどこかで止まってしまう。たぶん、稼働中一度も動かないロジックも組み込んでいる。

だから学生さんにも「違うかもしれない」という視点でいろいろなものを見る癖をつけて社会に出てきてほしい。すべてが正しいとするなら社会は成長しないのではないか。さらに良くなるはずだからいろいろな研究がされているのである。ぜひ一度考えてみていただきたい。

また教える側の先生方には考えることのできる学生を育てていただきたい。さらに行動に移すことを教えていただきたい。

多くの学生さんが積極的に学会発表するという行動に移してくれることを期待しています。

加藤 謙一((株)ハイマックス)